

PROGRAM NOTE

2000

近藤譲：茂吉の歌六首

メゾソプラノとピアノのための

Six Poems of Mokichi Saito

for Mezzo soprano and Piano

この作品は、「新しいうたを創る会」からの委嘱で2000年に作曲、同じ年の9月に東京で開かれた同会の第7回演奏会で、手嶋眞佐子(メゾソプラノ)と鈴木真理子(ピアノ)の両氏によって初演された。

私はそれまで、声楽曲というものを余り書いていなかった。実のところ、オペラ《羽衣》(1994)を別にすれば、この《茂吉の歌六首》の6つの歌曲が、日本語の詩による初めての声楽作品になる。私は長い間常に、日本語という言語の持つ音響的形態と西洋的音楽様式との結合に、漠然とした違和感を覚えてきた。日本語の歌曲作曲を躊躇っていたのは、その所為である。しかし、ただ躊躇っているだけでは、何も起こらない。取り敢えず書いてみなければ、解決の糸口も掴めまい。作曲委嘱の打診を受けたとき、そう心を決めて、引き受けることにした。つまり、この作曲は、私にとって一つの新しい、そして楽しい冒険であった。その結果がどうであったのか、勿論、私自身はそれを判断する立場ではない。ただ、例の違和感は、作曲後の今も払拭されずに私の中に留まっている。

歌詞として用いたのは、以下の通り、斎藤茂吉の短歌6首である。

こ め

I) かぎりなき木の芽もえつつ春ふけしひとつの山にのぼりてくださる (「寒雲」昭和14年)

ざと た さは おほぼこ はち

II) ひと里も絶えたる沢に車前草の花にまつはる蜂見つつをり (「石泉」昭和7年)

しだ ふ

III) なかぞらに音する雨はまたたくまに羊齒のしげみに降りそそぎけり (「石泉」昭和7年)

IV) 風やみし山のはざまは大き石むらがりあひて水を行かしむ (「暁紅」昭和11年)

さび かなかな

V) 午前四時過ぎたるときにあな寂し茅蝸のこゑはじめて聞こゆ (「寒雲」昭和14年)

ゆくはる ま

VI) 行春の雨のそそげる山なかにためらふ間なく葉はうごきけり (「寒雲」昭和14年)

PROGRAM NOTE

短歌という詩形式は、本質的に抒情的な性向をもっている。少なくとも私はいつもそう思う。この6曲の音楽が抒情性の強いものになっているとすれば、それは、私のそうした考えの反映に外ならない。

近藤 譲

初演：2000年9月21日 「新しいうたを創る会」第7回演奏会
(東京オペラシティ・リサイタルホール)

初演者：手嶋真佐子(メゾソプラノ) 鈴木真理子(ピアノ)

委嘱：新しいうたを創る会

出版：University of York Music Press (UK)

録音：WER7342-2

演奏時間：12分